

# 「臨床医のための大腸癌の分子生物学入門」

— Molecular Genetics and Colorectal Neoplasia: A primer for the clinician

Department of Colon and Rectal Surgery, The Cleveland Clinic Foundation

James M. Church, et al 著

東京大学教授・腫瘍外科

武藤徹一郎

東京大学助教授・腫瘍外科

名川 弘一 監訳

浜松医科大学名誉教授

馬 場 正 三

著者の Dr. James Church は Cleveland Clinic の David G. Jagleman 遺伝性大腸癌センターの遺伝性大腸癌登録の解析を Dr. David Jagleman 亡き後、一手に引き受け、Leed castle polyposis group meeting, ICGHNPCC meeting など活躍している外科医である。この領域の造詣が特に深く、昨年の American Society of Colorectal Surgeon でも Program Chairman として Hereditary Colorectal Cancer のシンポジウムを主催している。

私が 1985 年 Cleveland Clinic の visiting professeur として Cleveland Clinic に滞在していたころには Dr. David Jagleman がまだ健在で、そのころ彼は senior surgeon だったので以来親しくおつきあい願っている。学問的にもいろいろ彼から教えられる点が多かった。

彼の名著「Molecular Genetics and Colorectal Neoplasia」が東京大学武藤徹一郎教授と名川弘一助教授により翻訳され出版のはこびになったことは大変喜ばしい。

最近の分子生物学の進歩は爆発的とさえ言える。わが国では医学部で遺伝学の講座のある大学は少なく、遺伝・遺伝子というと、何となく難しいものとして“とっつきにくい”領域として敬遠しがちである。

癌は遺伝子の異常が多段階的に蓄積されて起こる病気であることが判明した現在、すべての医師にとって分子生物学の基礎を理解することは必須となった。

この点本書は臨床医のために分子生物学的手法の概略が平易な文章と適切な図で説明されており、大変理解しやすいように工夫されている。

大腸癌の外科は①外科技術の進歩、②病期分類、③内視鏡の診断・治療技術の寄与の時代をへて、④分子生物学の時代に入ったと言っても過言ではない。

外科医、内視鏡医、病理学者、分子生物学者が手を取り合って大腸癌の発癌機構を更に解明し、分子標的をターゲットとした新しい対癌戦略が構築される時代である。

この領域の情報は発症前診断など

癌の告知より難しい問題を含んでおり十分な理解がないと思わぬ pitfall に陥ることがある。

今日臨床家にとって欠くことのできない informed consent, genetic counselling などの問題についても一章を割き詳細に説明されている。

本書の内容は up-date であり、専門領域の知識も訳者の努力により極めて平易で要領を得た訳文となっている。

この点初学者がこの方面の知識を得るうえで最適の本であると同時にある程度分子遺伝学の知識のある医師にも、自分の知識理解度を整理するのに大変役立つと考える。

いずれにしても、時代的要請に応えた時宜を得た出版であるとお慶び申し上げ、広く臨床医に愛読されることを期待している。

● B5 頁 120 図 24 写真 19 表 11  
1998 定価(本体 3,500 円+税)  
〒400

—医学書院 刊(☎ 03-3817-5657)